

2006年、ショマルの夏(話題)

著者	岩? 葉子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	現代の中東
巻	42
ページ	1-1
発行年	2007-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005740

話題

2006年、ショマルの夏

岩崎 葉子

イランで「ショマル(北)」と言えば、ギーラーン州やマーザンダラーン州などのカスピ海沿岸部を指す。緑豊かで湿潤、コメやオリーブなどの栽培もさかんだ。カラカラに乾いたテヘランから車で数時間、山脈を越えると別天地が(と言っても日本ソックリなのだが)広がっている。ショマルはイラン国内の保養地のひとつとしてもつとに知られ、テヘランの資産家が別荘を建て海沿いのホテルには観光客が訪れていた。

さてギーラーン、マーザンダラーン両州は首都圏からのアクセスが圧倒的に有利なため、ここ10年余りの間に近郊リゾート地もしくは工業地域としてさらなる開発が進みつつある。テヘランからショマルへ向かう街道沿いには新造成地が断続的に続く。この手の新造成地はこれまで荒野であったところ、農地であったところなどさまざまだ。内陸部は工業団地や宅地開発が中心であるのに対して、沿岸部に近づくほど「リゾート開発」が目につく。

海沿いの道には不動産業者の店舗が軒を連ね、戸建て住戸の賃貸・売買をさかんと斡旋する。びゅんびゅん車の行き交う道路をはさんで海側には、こうした戸建てをさらに何十軒か囲い込んだ別荘村ができ上がり、門番兼管理人が不在所有者の代わりに家を管理している。町々ではテヘランをはじめとする周辺大都市からの観光客・避暑客などを受け入れる土産物屋・食料品店などが大繁盛、あたかもショマル全体が大きなリゾート産業を育てているかのようだ。

一方、短期間での集中的な開発による問題も噴出している。もともと地元の水・電力のキャパシティが拡大していないにもかかわらずホテル建設などが進み、水不足、停電が常態化している。建設許可を得た開発業者が森林の乱伐や井戸水の汲み上げを行うので、環境破壊も深刻だ。

人口の膨れあがったテヘランなどの都市部から、ひとびとが水と緑を求めてなだれ込めば乱開発も当然の帰結だが、はたして、ショマルはいつまで「リゾート」であり続け得るのか？うんざりするような喧噪と湿気のなかで、ふと東京を思い起こす筆者である。

(いわさき ようこ / 地域研究センター)